

## 【 赤 備 え 】

～ 虎昌・昌景&幸村・直政 ～

### はじめに

赤備え（あかぞなえ）とは、

・戦国時代から江戸時代初期にかけて行われた軍団編成の一種。軍団員が、甲冑（鎧・兜）や、旗指物などの武具を、朱（赤）の色彩で整えた。当時の朱色は、高級品の顔料「辰砂」（しんしゃ 水銀と硫黄との化合物 赤色絵具の主要鉱石）で塗られていた。赤備えの軍団は、戦場では特に目立ち、武勇に優れた武将が率いた精鋭部隊であることが多く、江戸時代を通じ「武勇の誉れ」の象徴として語り継がれた。

・創設は、戦国時代武田家の重臣飯富虎昌で、没後、弟（甥説もあり）山県昌景に引継がれた。武田家滅亡後、真田幸村（信繁）が踏襲し、慶長20年（1615）大坂夏の陣で「赤備え」で部隊編成し奮闘した。又徳川家康は、徳川四天王の一人井伊直政に、山県昌景隊の遺臣を預け、直政は、赤備えで部隊を再生・編成し、小牧・長久手の戦い、小田原征伐で、先鋒を務め奮戦し、「井伊の赤鬼」と呼ばれ恐れられた。

参考出典：〈ウィキペディア・2020/1〉・他

※ 武田軍団の編成の一例 ←騎馬部隊 50騎を中核とする部隊

「一備＝部隊」騎馬隊：中核部隊 約50騎 全員侍（武士）

足軽隊：戦闘員部隊 武器は槍が主 約380人

鉄砲隊：戦闘員部隊 少数、人数不明

小荷駄隊：補給部隊（人夫）約230人

合 計： 650～700人で一隊を編成

※ 山県 昌景：「譜代家臣団・最初から武田家に仕えていた家臣団」

：「軍事力」 150騎 兄虎昌の軍団を引き継ぎ、若い頃より戦功あり、異例の厚遇。

300騎 信玄最後の戦である三方ヶ原の戦いで家康を追い詰める。→〈しかみの像〉

戦国時代〈最強且精強の騎馬軍団〉といわれる。

※ 戦闘の方法：一備えのうち、隊（大）将クラス7、8名が騎乗。多くの

隊員は下馬し、馬を後ろに曳かせ槍を持って戦闘に臨む。馬は、後方で、〈馬備え〉を作って管理していた。再び必要の時は、勝機が見えた時＝敵を追い崩すとき、敗色濃厚＝逃げ出すときであった。戦国時代の戦闘は、〈下馬戦闘〉が主流であり、〈騎馬密集突撃〉はなかった。当時の日本馬は、現代のサラブレッド馬のように大型でなく、ポニー馬に近い馬体で、戦闘に不向きな訓練もされてなかった。

## 【1】武田の赤備え

飯 富 虎 昌 (おぶとらまさ・生年不詳～永禄八年 1565 切腹 五十六、七歳)

- ・飯富氏は、甲斐源氏の一門逸見氏の別裔といわれている。
- ・戦国武田氏初代武田信虎 (1494 生～1574 没)・二代武田信玄 (1521 生～1573 没) に仕え、数多くの武功を上げた。「甲山の猛虎」と呼ばれ、武田家を支えた忠臣である。生年不詳であるが信玄より十歳ばかり年長といわれている。
- ・名前は、飯富兵部少輔虎昌。通称兵部とよばれていた。虎昌の“虎”が示すように、信虎のお気に入りであった。虎昌が支配する領地の次男坊のみを集め騎馬隊を組成し、「赤備え」で武装させた。赤一色に統一した軍団が、戦場で忽然と出現し、まっしぐらに攻撃してくる様を想像すれば、敵方の雑兵は度胆を抜かれ戦意喪失逃走したであろう。
- ・敵からは「飯富の赤備え」と恐れられた。性格も強く、戦法も強引で、大敵強敵といえども頭から相手を呑んで攻撃したといわれる。赤備えの軍団の創設は、虎昌の性格に加えて、武田家に対する忠誠心、即ち戦で手柄を立てるといふ強い気持ちがあったと思われる。
- ・甲斐国は、国内に有力国人衆 (在国衆・国人領主) が争いを繰り返す内乱状態にあり、初代武田信虎が国内統一を果たすも、武田軍は、こうした有力国人衆の寄り合い、協力体制の要素がつよかった。信虎の晩年は、凶暴な振る舞いが多くなり家臣の信頼を失い、信虎は、長男信玄よりも、次男武田信繁を可愛がった。天文十年 (1541) 信玄は、父信虎を駿河に追放。虎昌も加担し、板垣信方・甘利虎昌に次ぐNo.3の地位 (次席家老的地位) につく。
- ・信玄嫡男太郎義信の「傳役 もりやく」の大役に。後継者たる嫡男の傳役は極めて重要な地位で、文武両道に優秀で人間且つ人情のわかる人間でなければ務まらない。いうなれば〈完璧な人物〉というお墨付きをもらったようなもので、順調にいけば、太郎義信が三代目になれば、飯富一族の更なる出世も約束されたものである。
- ・ところが、信玄と義信の間にすきま風が生まれる。第四次川中島の戦の際に起きた戦略の

対立、四男勝頼の高遠城主任命に対する妬みなどといわれていたが、直接的な原因は、駿河（今川氏）侵攻をもくろむ信玄及びその支持派と、親今川派の義信（義信の妻は今川義元の娘、駿河侵攻に反対）、その支持派との派閥抗争があったことが直接的な原因だといわれている。引き金は、織田信長が、桶狭間で今川義元を破ったことにある。

- ・永禄八年（1565）「義信事件=嫡子義信が家臣らとともに信玄暗殺を計画」が、計画段階で発覚。真相は未だ不明で、諸説ある。義信は、東光寺に幽閉され、永禄十年（1567）自害。虎昌も死罪に。本来謀反は、反逆であり、斬首が当然であるが、切腹となった。（処刑説も）。飯富家も廃絶という悲惨な結果になる。謀反計画中、弟山県昌景の知ることとなり、昌景は、信玄に〈密約の書状〉を見せ、こう訴えたという。〈義信公は若い、ご意見を申してご慈悲を、罪はわが兄兵部一人〉と。信玄は涙を流して喜んだという。昌景は、親兄弟の側でなく、主人=信玄を選択したといえよう。逆に、虎昌は、“家=飯富家”を守るため事前に昌景に情報を流していたという説もある。
- ・武田家の父子の軋轢は、また繰り返された。

#### 山県三郎兵衛尉昌景(やまがたさぶろべえまさかげ 享禄2年1529生~天正3年1575没)

- ・飯富虎昌の弟（甥という説もある）で、最初は飯富源四郎と名乗り、義信事件後、武田家重臣の中で途絶えていた美濃・山県家を継ぎ、ここに 山県三郎兵衛尉昌景となった。
- ・信玄の時代、「武田四天王」の一人。風貌は小柄で、150センチ（140センチ説も）そこそこであり体重も軽く、瘦身に兎唇（としん 兎の唇の形）の醜男だったといわれている。
- ・飯富虎昌の赤備えを、継いだ昌景は、信玄の駿河侵攻、上野侵攻、後北条氏との戦いなどで、武功を重ねる。有名なのは、元龜三年（1573）の〈三河・遠江侵攻〉である。武田軍の背後を攻めた家康を返り討ちにし、追撃戦を繰り広げ、家康自害寸前まで追い込んだ。家康が、初めて赤備え軍団の“怖さ”を痛感したといわれる。→2回目は、大坂の陣で、真田幸村の赤備えに、本陣まで侵入されたとき。
- ・元龜四年（1573）信玄が没して武田勝頼（1543~1582）が継ぐ。昌景からすれば、信玄は“大”であるが、勝頼は“小以下”と思えた。そこに勝頼と昌景との間に相互不信の念が生ずる。即ち信玄以来の老臣と勝頼の新参側近たちとの戦法の争い=内部分裂が生まれた。
- ・天正三年（1575）「長篠の戦い・主戰場設楽ヶ原」が始まる。昌景は、「この戦は、一旦撤退すべき」と具申するも聞き入れられず、討死覚悟で〈馬防柵〉に突入、戦死。
- ・「丸島和洋氏の説」 丸島氏は、その著作「武田勝頼」で、次のように書いている。  
〈赤備えといった軍装の色は許可制で、信玄は、勝頼の従兄弟信豊に対し、元龜3年、まさに「西上作戦」の時に、旗指物に赤備えを用いる独占許可を与えた。このことは、かつ

て虎昌が率いた飯富の赤備えが、昌景は継承されていないことを示す。)

## 【2】真田の赤備え

真田 幸村 (信繁) (さなだゆきむら/のぶしげ 永禄10年1567生~慶長20年1615没)

- ・真田家は、信濃国佐久郡の国人海野氏の一族。
- ・真田幸隆 (幸村の祖父 1513~74) が当主の時、武田信虎とは、敵対関係にあったが、信玄の時代に、山本勘助に見出されて武田陣営に入る。信玄より、八歳年上で、勘助よりは、十三歳年下といわれている。信玄の最大の汚名 (敗北) といわれる〈砥石崩れ〉を、その翌年 “謀略 (金)” により城を奪取。
- ・幸隆には三人の子がおり、長男信綱・次男昌輝・三男“知将”昌幸 (1547~1611) である。信綱・昌輝は、信玄の側近として仕えるも、長篠の戦いで討死。この戦いで、武田氏の重臣山県昌景、内藤昌豊、馬場信春らが討死。かくして、真田家は、三男昌幸 (幸村の父) が継ぐ。
- ・信玄死後、昌幸は、とりあえず武田勝頼 (1543~82) に仕えるが、時代の動きにより、織田→上杉→豊臣と主君を変えていく。最後は、天下人豊臣秀吉の命令により、徳川家康と和睦。長男信幸 (信之) (1566~1658) は、家康重臣本多忠勝の娘を貰う。一方次男信繁 (幸村) は、秀吉の重臣で石田三成と親しい大谷吉継の娘を妻とした。秀吉死後、「関ヶ原の戦い」では、昌幸 (家康嫌い) と幸村は、西軍 (石田軍) に味方し、信之は、東軍 (徳川軍) 付く。東軍勝利。
- ・慶長20年 (1615)、大坂夏の陣で幸村 (信繁) は、敗色濃厚な豊臣秀吉の誘いに乗り、自分の部隊を、「赤備え」で編成した。真田隊は、天王寺口の戦いで、家康本陣を攻撃し突き崩しあと一步のところまで迫ったという。後世「真田は日本一の兵」と称賛される。
- ・なぜ幸村は、部隊を赤備えでそろえたのか。
  - a 真田家は武田の家臣筋。赤備えで信玄の意思を示した?
  - b 赤備え=最強の部隊。それを纏うのは、自分たち以外にないという自負?
  - c 家康に、三方ヶ原で敗走した時の“恐怖”を思い出させたかった?
- ・尚、真田家の赤備えを、導入したのは、文禄年間 (1592~) に、秀吉から、「武者揃」を命じられた、兄信幸が、家臣に「いつものことくあか武者 (赤備え) たるへく、指物はあかね」という指示をだしており、すでに赤色を使用していた。実際の戦で備え戦ったかは不明。

### 【3】井伊の赤備え

井伊 直政 (いい なおまさ 永禄4年1561生～慶長7年1602没)

- ・戦国大名今川氏の重臣井伊直親の子。遠江の〈井伊谷〉で生まれる。
- ・十五歳の時、浜松城下で鷹狩り中の徳川家康に見出され仕える。以後、戦の時。徳川軍の旗本先手役本多忠勝(徳川四天王)、榊原康政(徳川四天王)と並んで先鋒役で活躍。
- ・武田氏滅亡後、家康の甲州計略(天正壬午の乱)の際、武田遺臣の招撫に功あり、家康は武田遺臣・曾根昌世(まさただ)ら百二十人余を直政に付け、山県正景の「赤備え」を継承させた。
- ・先鋒部隊・井伊の赤備えの初陣は、小牧・長久手の戦いで、直政自ら赤の兜・具足を纏い、敵陣を蹴散らしていく様は、あたかも赤鬼のごとし。以後「井伊の赤鬼」と畏怖された。

※ 曾根昌世：(生没年 不詳)

信玄から信頼され、「我が目の如し」と称えられ、偵察役として活躍。

※ 信玄と家康：

- (1) 家康と信玄は、戦国時代は敵対関係にあったが、年上信玄に対し、家康は若干なりとも畏敬の念が、あったのではないか。又、家康は信玄と同型タイプの武将で、性格も発想も似たところがあると主張する人もいる。
- (2) 天正年間(1573～1593)、三河以来の腹心石川数正が豊臣方に離反後、軍政改革を行い、武田の軍法を一部踏襲したといわれる。『常山紀談』には、「武田家の士大将山県三郎衛昌景が一陣の軍兵、皆一色に赤かりしを、東照宮(家康)御覧じて好ませ給ひ、直政に仰せられて、甲冑を始め、旗指物、鞍、鎧、鞭に至るまで皆一色に赤色なり」。
- (3) 遠江・袋井縄手を通る度、昌景の武勇を褒めたたえた。  
武田遺臣には、〈以前の如く、赤備えの先手役として、故昌景に劣らぬよう、万千代(直政)をもり立ててほしい〉
- (4) 大坂夏の陣の時、伏見城の櫓から井伊軍を眺め、(あの光輝く若者どもはいったいなんだ。なんの心得もなく、仏彩色したようなものではないか)。飾り物化した赤備えをなじる。

- ・家康関東入封後、関ヶ原の戦いの論功行賞で、上野国(高崎城)三万石・近江国十五万石の十八万石を拝領し佐和山城へはいる。

※ 佐和山城：石田三成の居城。山道と北国街道の分岐点に近いが、山

城ため軍事拠点としては不適で狭い。

- ※ 彦根城：慶長九年（1604）湖岸に面した彦根山（金亀山）に移転築城。  
近江国は、豊臣政権の権力基盤の地で、豊臣方大名の領地が多い。  
大坂には、豊臣秀頼がいた。

#### 【4】その他の赤備え

- ・「武田衆の赤備え」：飯富・山県以外に、上野衆・小幡信貞一統 500 騎。浅利信胤一統騎不明。「甲陽軍艦」によれば合計約 1,000 騎の赤備えがあったという。

**小幡信貞**：東国に土着した藤原氏一派の末裔。上州を代表する国人衆（上州八家）。

真田氏同様「御譜代同意」として、厚遇されており、天正 2 年には、勝頼より赤備えの軍装を許可されていた。

小幡衆は、〈上州の赤備え（五人目の）・上州の朱武者・馬上巧者〉とも言われている。

- ・「小十人組の甲冑」：江戸時代、将軍が外出すると時、護衛隊員が朱色の甲冑着用。武田の赤備えに従って制定されたという。一組 20 人。士分は下限で百俵。甲冑は幕府が支給。
- ・「福島正則の赤坊主」：江戸初期、広島藩主福島正則が、部下の精鋭武者に朱色の甲冑を着用させていた。

#### おわりに

- ・戦国時代の戦（合戦）は、武具等の“色”を統一するだけで、勝てるものではない。然しながら、実際に戦う戦闘員達にとっては、戦闘意識の高揚に効果はあったであろう。又、敵にとっても、赤備えの軍団は強いなどと風評・噂で戦闘意欲が下がるであろうことは想像できる。
- ・現代でも、スポーツ競技では、団体戦・個人戦を問わず「同一ユニフォーム」を着用することが多い。人間個人単独で、生きていくことは難しく、何らかの“団体・グループなど”に所属している。その帰属意識高揚のため、生きてゆくために、“統一した色”を持つことは必要かも。

## 〈参考資料〉

- |                            |          |         |
|----------------------------|----------|---------|
| ・「馬」が動かした日本史」              | 蒲池明弘     | 文春新書    |
| ・「謎とき日本合戦史」                | 鈴木真哉     | 講談社現代新書 |
| ・「時代考証日本合戦図典」              | 笹間良彦     | 雄山閣     |
| ・「その後の東国武士団」               | 関 幸彦     | 吉川弘文館   |
| ・「英傑の日本史 風林火山編」            | 井沢元彦     | 角川文庫    |
| ・「武田二十四将」                  | EIWAMOOK | 英和出版社   |
| ・「初心者にもわかる徳川將軍家十五代」        |          | メディアックス |
| ・「滋賀県の歴史」                  | (著者名略)   | 山川出版社   |
| ・「山梨県の歴史」                  | (著者名略)   | 山川出版社   |
| ・「フリー百科事典 ウィキペディア 2020/01」 |          |         |
| ・「歴史と旅 図説武田信玄の世界」          |          | 秋田書店    |

飯高 虎昌



《信玄公宝物館蔵》 (出典:EIWAMOOK/武田二十四将)

真田 幸村



《上田市立博物館蔵》

(出典:ウイキペディア)

山県 昌景



《山梨県川渚温泉・山県館蔵》

(出典:EIWAMOOK/武田二十四将)

井伊 直政



《彦根城博物館蔵》

(出典:ウイキペディア)